

教育長室だより

第 36 号

2022.8.10

今年の猛暑もこれまで以上のように感じられます。気候変動はデータというより実感として確かなようです。

新型コロナ感染は7月に入り、感染力の強い変異種の広がりや急激な拡大を続け、国も県も史上最多の感染者数を記録しています。ただ、対応は大きく変わり、様々な制限や自粛要請はなくなっています。社会全体として、2、3年前のような恐怖感が薄れてきているのも事実のようです。夏休みに入って、学校が閉鎖となることはなくなりましたが、感染が広がって身近に重篤な患者が出ることは避けなければなりません。今年も新型コロナと熱中症の予防には十分な注意が必要な夏になっています。

○

さて、今回は子どもの環境について考えてみます。

今回、なぜ環境について考えるかという点、今まさに夏休みの真っ最中で、子どもが日々どのように過ごしているかが気になるからです。

今年の夏は、小学校のプール開放をしていません。新型コロナ感染が急拡大し、安全に着替える環境を確保できないことなどが理由です。また、教育委員会で企画していた「夏休み各種教室」も急激な感染拡大を考慮して中止にしました。

さて、プール開放や各種教室は長い休暇の中でできるだけ“有意義な時間の過ごし方”を子どもたちに提供しようという趣旨で行っているものです。ところが新型コロナの感染急拡大によってその機会も奪われた形になりました。

そこで気になるのが、夏休みの子どもの過ごし方というわけです。

○

今年3月、『バカの壁』で有名な解剖学者の養老孟司氏が『子どもが心配』という新しい本を出しました。これは子どもに関心を持つ各界の4人との対談集です。対談したのはまず精神科医の宮口幸治氏で70万部を超えた『ケーキの切れない非行少年たち』の著者です。2人目はハーバード大学でも教えていた小児科医の高橋孝雄氏。3人目は先端技術開発によりMRIの技術を大きく改良した科学者小泉英明氏。4人目が教育者で自由学園学園長の高橋和也氏です。

○

それぞれ子どもの教育に一言ある人で、養老氏との対談の中に様々なヒントがある本です。詳しくは紹介できませんが、子どもの環境に関わる場所をつまみ食いしてみます。主に人的環境に関する話になります。

○

まず、宮口氏は「褒める教育」に疑問を呈しています。褒めることは基本的にいいことだが褒め方に問題が少なくないということです。やっていることと無関係のこと

を褒める、褒めるほどのことでないことを褒める、子どもが信頼していない人に褒められる、などはあまり良いことがないということです。むしろ問題を先送りするだけであると。これは「人的環境」に関わる話ことになりますが、“適切に褒める”ことの大切さが分かります。

○

次に小児科医の高橋氏は少子化の問題はそれに対する違和感や危機感を共有しないことだと言います。養老氏も少子化の問題は人口減少ではないと言います。若い世代が子どもを望まなくなったのは、子どもをほしいという気持ちや子どもがかわいいという気持ちを持ってなくなったことが原因だと言うのです。

そしてネットの過剰利用がもたらす実体験の減少に危機感を持っています。これは養老氏も常々言っていることで、自然の中での体験の価値を説きます。自然体験は何不自由ない生活と違い適度のストレスを伴うことも子どもにとって価値があるということです。そして高橋氏はネットに頼りすぎる育児に大きな警鐘を鳴らしています。

○

先端技術研究者の小泉さんは、褒めることの価値を強調します。宮口氏と違うようにも思えますが、そうではなくて1、2歳くらいまでの愛情と褒めることの重要性を言っています。宮口氏は不自然な褒め方を良くないと言っていますが、小泉さんは幼い頃はしつけより愛情が大切で、正しく褒めることの重要性を説くところの根本は宮口氏と同じだと感じました。また、乳幼児が認知世界を広げるための動きの「身体性」の重要性について養老氏とも口をそろえて強調します。頭でなく体で感じ、覚え、世界を認知していくことの重要性です。

○

自由学園の高橋氏は教育者なのでさまざまな場面の紹介があります。

自由学園の伝統の一つに、上半身裸で保護者に体操を披露する「体操会」という行事があるそうです。ある年、生徒の中から裸を強制するのはおかしいという声が上がって、リーダー達は裸か着衣かを自分で選べることにしました。そのとき服を着ることを選んだのは一人だけでしたが、みんなが裸の中で一人服を着るのは恥ずかしいと思ったリーダーが「僕も着る」と言って着たというエピソードが紹介されています。

自由学園では自分の頭で考えることが徹底されていることが伝わります。生徒にそういう裁量権を与えているのも、自分の頭で考えるリーダーが育っているのも学園の理念に基づく人的環境によるものだろうと考えられます。

○

これらの対談から分かることは、子どもにとってどういう環境におかれているかが成長を左右する最も大きな要素であるということです。“子どもを取り巻く環境”は経済的に豊かであるかどうかとか、文化的な水準が高いか低いかというようなことではなく、子どもの成長にとって大切なことは何かを考え、正しく判断できる大人が居ることだろうと感じました。